

『カンタベリー物語』本文の中でチョーサーが初めて使用した ラテン語とフランス語の研究 (1)

保谷 一三

これはチョーサーが『カンタベリー物語』本文ではじめて借用したラテン語とフランス語の研究である。その総数は418語で、Joseph Mersand 著 *Chaucer's Romance Vocabulary* (Reissued in 1968) の Appendix II Romance Words Introduced by Chaucer の中からピックアップした。今回ははじめの36語を扱う。借用の年代は1386年(頃)と確定しており、これとフランス語における初出年とを比較し、借用の早さ、借用の文化的背景を論じる。その際大陸のフランス語と英国のフランス語とを区別し、なじみのフランス語から海峡の彼方のフランス語からかによって借用の意味のちがいを明らかにする。

キーワード：チョーサー，ラテン語，フランス語，借用語

1. AF¹⁾ a-begged a F²⁾. FKL³⁾. 1580⁴⁾.

To goon *a-begged*...

(大意) (魔術師へ借りを払ったために) 乞食になつても。

Skeat の Notes⁵⁾によると、begged は動詞 beg から派生した名詞で、beggeth に相当する。a-は on の短縮形である。Mersand は Not in N. (=O.) E. D. としているが、O. E. D. では Begged, th *Obs.* で出ている。c 1386年 Chaucer 初出である。OF⁶⁾ にはなさそうである。Rothwell⁷⁾によると、AF *begger v* があり、「乞う」の意である⁸⁾。

2. L⁹⁾ ablucions *n pl* G.CY.¹⁰⁾856.

Oiles, *ablucions*,...

(大意) 油類に洗滌薬に…。

AF にはなく、OF ではキリスト教ラテン語として手洗い (*ablutio*, action de se laver les mains pour se purifier) の意しかない。ここでは錬金術 (alchemy) の文脈の中で使われている。O. E. D. は In early usage in alchemy and chemistry, the purification of bodies by the use of suitable liquids. と説明している。錬金術のラテン語文献から直接に借用したと考えられ

る¹¹⁾。

3. OF *abroche v* D. WB. 177.

(…sip) / Of thilke tonne that I shall *abroche*.

(大意) 私が大樽に口をつけるから一緒に (飲みなされ。)

Greimas では *brochier*, Dauzat では *brocher* で、1080年 OF 初出、*Roland* では馬に拍車をかける意、のち *passer l'aiguille* (針で刺す) の意となっている。AF も同様で、*tap* の意はない。O. E. D. によると、*broach* に *pierce* (a cask, etc.) so as to draw the liquor の意があるが、c 1440年初出となっているが、ここに Chaucer の用例があるので c 1386年と訂正しなければならない。なお、a-は接頭語である。

4. F *abstinent a* I. Pars¹²⁾. 945—50

...and been *abstinent* in etinge and drinkinge, in spekinge, and in dede.

(大意) (貞淑な妻は) 飲食、言行が控え目である。

Mersand は *abstinet* と綴っているが間違いである。AF には *abstine* (=abstinence) しかなく、Dauzat によれば *abstinent* は1160年 OF 初出である。それでも名詞の *abstinence* の方が1050年初出で、早い。同じことは 31. *arrogant* についても言え、*arrogance* の方が早い。抽象概念の議論が先に盛んとなり、それを人に適用することは少しあとにずれたことを表わしてい

る。

5. F acceptable *a* D. Som¹³⁾, 1913.

(…oun preyerer—)/Ben to the hye god more
acceptable (/Than Youres)

(大意) 高きにまします神は(皆さん方の祈りよりも) 私達の祈りの方をよりおききになる。

Greimas によれば1160年初出。Dauzat は1468年初出で、おかしい。AF にも *acceptable* がある¹⁴⁾。

6. OF accomplice *v* B. Mel¹⁵⁾ 2255—60.

And al-be-it so that your emprise be establissed
and ordeyned by great multitude of folk, yet thar ye
nat *accomplice* thilke same ordinaunce but yow like.

(大意) たとえあなたのなさることが大勢の人々によって賛成されても、気が進まなければ同じ決定を実行する必要はありません。

自分の富をねたむ敵に娘を切られた Melibeus が人々を集めて、敵の財産没収を提案した時の妻 Prudence の忠告で、庶民は金持におもねるから気をつけなさい、という趣旨である。

Greimas では *acomplir* 1121年初出。Dauzat *accomplir* 1119年初出で、初出のくいちがいが見られる。AF にも *accomplir* がある¹⁶⁾。

O. E. D.によれば *fulfil*, *perform*, *or carry out* (an undertaking, design, desire, promise, etc.) の意で c1386年 Chaucer 初出である。フランス語現在分詞の *—issant* 語尾から *—iss—* の要素を英語は採用し、のち *s* を口蓋音化して *—ish—* にした。Chaucer は過渡期で *accomplicen* と *accomplishen* が併存している¹⁷⁾。

7. F accion *n* I. Pars. 95—100.

The first *accion* of Penitence is, that a man be baptized after that he hath sinned.

(大意) 悔悛の第一の行いは罪を犯したのち、洗礼を受けることである。

Dauzat によれば, *action* は *début* XII^s.初出で, *acciun de grâce* (神に対する感謝) という例がある。AF にも用例がある。O.E.D.によると, *action* は *in-action* の反対で, 何かすることを意味する。 *acciouns* *or workings of Penitence* (悔悛の行い) の例をあげている。のちに手足の発動の意も生じるが, この場合

は *speech*, *writing*, *thought*, *contemplation* と区別される。

8. L adjuracioun *n* I. Pars. 600—5

But lat us go to thilke horrible swering of *adjuracioun* and *coniuracioun*, as doon thise false enchauntours…

(大意) しかし今度はあの恐ろしい誓言に移りましょう。呪文を唱えたり, 霊を呼び出したりしてする誓言で, かの偽魔法使…がやっていることです。

Skeat の Notes によると, 仏語原典そのままの英訳であるらしい¹⁸⁾。

この名詞は OF にも AF にもなさそうで, 動詞形 *ajurer* 又は *adjurer* は XIII^s.初出で存在する。

9. OF alaunts *n* pl A. Kn¹⁹⁾. 2148.

About his char ther wenten whyte *alaunts*.

(大意) (決闘の一方のパラモンを支援する)トラキア王の乗る軽二輪戦車のまわりを数匹の白い大型マステフ犬が行進した。

Greimas によると, *alant*, *alant* は1167年初出で, *Gros chien de chasses* (大型の猟犬) である。 *The Riverside Chaucer*²⁰⁾によると, Alani 族(ケルトの一族か?) から西ヨーロッパにもたらされた犬だそうである。

10. ONF alayes *n* pl E. Cl²¹⁾. 1167.

(For if that they were put to swiche assayes,) The gold of hem hath now so badde *alayes* (With bras, …)

(大意) (彼等は Grisildes の受けたような試練を受けると) 彼らの金 (= 強さ) は真鍮 (= 弱さ) と質の悪い合金をつくり…。

Webster's New World Dictionary 3rd college edition によると, OF *aloi*, AF *alei* で, ME *alai* となった。現代英語の *alloy* は再び OF に戻ったことになる。Greimas によれば, もとは動詞で OF *alier*, *—oier v* 1080 *Roland*。Dauzat によれば, *dès le XII^s. sens de <allier par traité> et <allier des métaux>* で, 合金を作るの意は1世紀おくれる。O.E.D.によれば, ME *allayen v* の初出1377年, *allay n* の初出は c1386年 Chaucer である。なお Skeat によれば1163—end は

Chaucer の自作 (それまでは Chaucer の translation) であり, Chaucer が独自に名詞形を探してきたことになる。OF aloi は1268年初出だし, AF alei も既にあっただろう。

11. F albificacioun *n* G.CY. 805.

And of watres *albificacioun*,

(大意) それに薬液による (物質の) 白色化 (→銀への転換) 又は薬液の白色化 (→銀の沈澱)。

Skeat によると, これは reddening of it (=water) と区別される。

Greimas によると albe, aube (白い) は XII^s. 初出である。従ってそれ以後の造語となる。O.E.D. によれば, albification は med.L (中世ラテン語) から F を経て英語に入り, c1386年 Chaucer 初出となる。

なお, alchemy の盛んな時代情況だったらしく, *The Riverside Chaucer* (p.948) によると, Pope John XXII (1316—34) condemned it (=alchemy or the transmutation of materials), principally because of swindling and counterfeiting. だそうである。Chaucer が CY. で alchemy に熱心なところを見ると, ただの作家ではない。

12. ML alkaly *n* G.CY.810.

Sal tartre, *alkaly*, ...

(大意) 炭酸カリウム塩, アルカリ, ...。

Mersand, O.E.D. は F 由来としているが, Dauzat によると, alcali はアラビア語から入って1509年フランス語初出であり, Chaucer より遅い。Random House では MF 由来で, 1300—50年英語初出だそうだが, 典拠は不明である。Webster's Third New International Dictionary は ML alcali 由来としている。筆者はこれを採用する。というのは *The Riverside Chaucer* (p. 948) は Despite the vastness of the corpus of Latin alchemical literature と前置きして, 近く Chaucer 使用分の研究書が出る予定だと言っているからである。

13. AF? alkamistre *n* G.CY.1204

And whan this *alkamistre* saugh his tyme,

(大意) そしてこの錬金術師はチャンス到来とみて,

Dauzat によると alchimie が1265年初出 (chimie は1356年初出), alchimiste 1532年で Chaucer の al-

kamistre より遅い。一方, O.E.D. は alkamister は al-kamiste + -er で, 仏語形 + 英語動作者語尾であると分析する。しかし alchemiste がまだ OF になかったとすると, med.L alchamista から直接造語したか, あるいは中間に AF を置いたかのどちらかとなる。一応 AF? としておきたい。

14. AF altercacioun *n* E. Mch²². 1473.

As al day falleth *altercacioun*

(大意) 口論はいつでも起るもので,

Dauzat によると, altercation の初出は fin XIII^s である。Rothwell によれば AF にも altercacioun があるから, 直接には AF としておきたい。

15. OF amalgaming *n* G.CY. 771.

...and of the care and wo/That we hadde in our matires sublymyng,/And in *amalgaming* and cal-cening/

(大意) ...そして不安のうちに物質を昇華させたり, (粗水銀と呼ばれる水銀を他の金属と) 混ぜて煅焼する。

Dauzat によると amalgamer *v* は XIV^s. 初出であるから, すぐに Chaucer に採用されたことになる。

16. OF ambel *n* B. Th²³. 2075.

His stede.../It gooth an *ambel* in the way/Ful softly...

(大意) 騎士トウバスの乗馬はゆっくりと全く静かに...進む。

Greimas によると, ambler *v*, amble *n* は共に fin XIII^s. の初出で, amble は aller l'amble (ゆっくりと進む) のように使う。しかし lexis によると, *v* も *n* も 1100年初出である。また Dauzat によると, *v* は fin XII^s. である。どちらにしても c1386年 Chaucer より早い。AF には ambler *v* はあるが, 名詞は ambleure である²⁴。

17. OF amble *v* D. WB. 838.

...What spekestow of preambulacioun?/What! *amble*, or trotte, or pees, or go sit down; Thou lettest our disport in this manere'.

(大意) (Somonour は Frere が Wyf of Bathe の

長い前口上を‘This is a long preamble of a tale!’と言って笑ったのをとらえて) *preambulacioun* て何だね?え, 側対歩, それとも速足, それとも静止, それとも伏せかい。我々を妙な方法で楽しませてくれるねえ。

Greimas, Dauzat はもとより, Rothwell の辞典にも *ambler* *v* が出ている。従って直接には AF から採用したと言えるかも知れない。

18. OF *amender* *n* D. WB. 1197.

Povert is.../.../A greet *amender* eek of sapience

(大意) 貧しさは…また知恵を改善する大きな作因となる。

Skeat の Notes によると, ‘sapientie reparatrix’ という Vincent of Beavais のラテン語の英訳である。

Greimas, Dauzat 共に *amender* *v* を fin XI^s. 初出としており, AF にも *amender* *v* がある²⁵⁾。O.E.D. によれば *amend* *v* +*-er* で c1386年 Chaucer 初出である。従って OF から, あるいは直接には AF から造語されたといえよう。

19. AF *amerciments* *n* pl I. Pars.750—5.

And eek they (=thise harde lordshipes) taken of hir bende-men *amerciments*, which mighten more resonably ben cleped extorcions than *amerciments*.

(大意) そしてまた彼等(厳しい領主共)はその奴隷からお慈悲代を取る。それなんかお慈悲代というより搾取金と言った方が正しい。

Greimas によると *amerciment* は1215年初出で, <*amende pécuniaire, rachat d'une peine*> の意, 罰金である。O.E.D. によればこれは法で定めた犯罪の罰金ではなく, 裁判権を持つ者の自由裁量によつて課される罰金である。従って引用文のような苦情の出る余地がある。

20. AF *amorously* *adv* E. Mch.1680.

.../So that ye use, as skile is and resoun,/The lustes of your wyf attempely;/And that ye plesse her nat to *amorously*,/...

(大意) …人は理性にかなうように妻の欲望をほどほどにあしらい, あまりに愛情をかけて喜ばそうとしないように…。

Greimas によれば *amoros* *a* は1220年初出である。また Dauzat によれば *amoureux* *a* が1190年初出で, これから *amoureuement* *adv* が XIII^s. に派生した。Rothwell によると AF に *amor(o)us* *a* がある。語形からみて AF に最も近い。

21. AF *anoyaunce* *n* I. Pars.1045—50.

This orisoun moste eek been seyde with greet humblesse and ful pure; honestly, and nat to the *anoyaunce* of any man or woman.

(大意) この祈りはまた非常にへり下った, 完全に純粋な気持で, しかも正直に, そして男にしろ女にしろだれかを苦しめるためでなく, 唱えられねばならない。

Skeat の Notes によると, the French text が下敷にあるらしい。Greimas によると, *enoier* *v* は1080年 *Roland* 初出で, 名詞形は *enoiment* 1120年, 次いで *enoiance* fin XIII^s. である。しかし Rothwell によると, AF に *anoier* *v* がある。従って Chaucer の *anoyaunce* の語形は AF から直接に來ているといえよう。

22. AF *anoyful* *a* B.Mel.2220—5

For al-be-it so that alle taryng be *anoyful*, algates it is nat to repreve in yevinge of Iugement, ne in vengeance-taking, whan it is suffisant and resonable.

(大意) というのは, たとえ遅延は困るとしても, しかし判決を下す場合にしろ, 仇を討つ場合にしろ, 法に適い, 道理が立つなら, 非難されるべきものではない。

O.E.D. によれば *anoy* +*-ful* で c1386年 Chaucer の造語である。*anoy* が OF か AF かについては, 前 21. 項と同じで OF は *enoier*, *enoiance* のように *en-* の系統であり, AF は *anoier* のように *an-*²⁶⁾ の系統であるから, やはり AF と考えるのが適当である。

23. AF *annueleer* *n* G.CY.1012.

In London was a preest, an *annueleer*,

(大意) ロンドンに司祭がいた。年忌の読経をする役目の人だった。

Skeat の Notes によると, F *chantanz annuales* に

由来する。すなわち, singing annuals, or anniversary masses for the dead.

O.E.D.によれば AF に annueller (=one who celebrates annuals, or anniversary masses for the dead) がある。しかし Rothwell は採録していない。一応 O.E.D.に従っておく。

24.L annunciat *past p.* B. MK²⁷⁾. 3205.

Lo Sampson, which that was *annunciat* / By than-gel, long er his nativitee /

(大意) 闘士サムソンを見よ。彼は生の予告を生れるとうの前に天使から受けていた。

Dauzat によると OF annoncer^{1080年 Roland} 初出である。Rothwell によれば AF annoncer 'to proclaim' がある。ただ「告知する」の用例はない。OF ないし AF から借用するなら *annoncet* 又は *annunciet* があり得る。しかしここでは 3207 行の *consecrat* と押韻したいので、ラテン語の過去分詞 *annunnciat* を採用したと考えられる。

25. OF apoplexye *n* B. NP²⁸⁾. 4031.

Napoplexye shente nat hir heed

(大意) 質素に暮す未亡人は卒中に頭をやられることもなかった。

Dauzat によれば (中世) ラテン語 *apoplexia* から入って, XIII^s. フランス語初出である (*apoplexie*)。病気について O.E.D. は a malady, very sudden in its attack, which arrests more or less completely the powers of sense and motion; it is usually caused by an effusion of blood or serum in the brain, and preceded by giddiness, partial loss of muscular power, etc. c1386 年 Chaucer 初出。

26. AF arbitracioun *n* B. Mel. 2940—5.

'Certes,' quod Prudence, 'it is an hard thing and right perilous, / that a man putte him* al outrely in the *arbitracioun* and Iuggement, and in the might and power of hise enemys. * him は再帰代名詞

(大意) 「本当に」と妻ブルーデンスは言った。「辛いですし、まさしく生死にもかかわるのですから、人間はしつこく裁かれ、敵の意のままにはされたくないものです。

Dauzat によると *arbitre* <volonté> が XIII^s. 初出である。Greimas は何も記載していない。Rothwell によると, AF に *arbitracioun* があり, 今日の *arbitration* の意味であるとしている。s'il voleit (*imparfait ind.形*) *mettre ses ditz matires en a. Lett & Pet* 75. 20 (申し立ての件を裁判にかけたいとしたならば) という用例があることから, 意味, 語形の両方から AF 由来と決定できる。

27. OE plus AF *archewyves n pl* E. Cl. 1195.

Ye archewyves, stondeþ at defence, / ... / Ne suf-freth nat that men yow doon offence.

(大意) 覇気ある妻よ, 戦う姿勢を取りなさい。/ ... / 男に挑発を許してはなりません。

Cl. の歌の一節であるが, 歌はのちに *Lenvoy de Chaucer* (チャウサーの反歌) という題がつき *The Riverside Chaucer* によれば "Chancer's independent composition" である。

lexis によると, *archidiaconus* (副司教) は 1190 年の初出で, LL *archidiaconus* のフランス語化である。これで見ると, フランス語ははじめから *archi-* 形を守っている。Daugat によると, XVI^s. からこの接頭語が多用された (*qui s'est développé depuis XVI^s. à partir de termes hiérarchiques... et indique une qualité (ou un défaut) portée à un point élevé*). 英語の場合もこの多用の中に入るが, *arche-* という形態が OF と異なる。Rothwell によると AF には *archi-* もあるが, *arche-*, *arce-* も多く, こうしたことから, *arche-* は AF と断定できそうである。O.E.D. によると, *archwife* (現代綴りによる) は *wife of superior order*; a strong or masterful wife, a virago ('Mannweib' Mätzner) c1386 年 Chaucer である。

28. L *armipotente a* A. Kn. 1982

Ther stood the temple of Mars armipotente,

(大意) 軍に強いマルス神の神殿が立っていた。

Skeat の Notes によると, この語は borrowed from Boccaccio's *armipotente*, in the *Teseide*, vii. 32. である。Greimas, Dauzat には *arme*^{1080年 Roland} があるが, *potent* は伝統的にフランス語にはない。puissant があるせいであろう。従つて *armipotente* はラテン語に直結した借用語である。O.E.D. によれば *potent* は

ラテン語由来の形容詞である。因みに医学用語の英語 impotence はフランス語では impuissance (sexuelle) (陰萎) という。

29. L armoniak a G. CY 798.

Arsenik, sal armoniak,...

(大意) ヒ素, 塩化アンモニウム, ...。

文脈としては alchemy の材料を enumerate している。Skeat の Notes によると, これらは 'four spirits' のそれぞれ一つだという。つまり gases or vapours になれる volatile substances で, sulphur, sal ammoniac, quicksilver, and arsenic (or orpiment) を言う。The Riverside Chaucer によると, 反対に常に solid state である物質を six bodies といい, gold, silver, lead, tin, iron and copper がそれであり, quicksilver は両方にまたがると考えたという。O. E. D. によれば armoniac は ammoniac の古形である。ラテン語では sal ammoniacus で, フランス語では, Dauzat によると, XII^es. から sel ammoniac であるところから, c1386年 Chaucer の借用はラテン語から直接ということになる。

30. AF armurers n pl A. Kn. 2507

...and faste the armurers also/With fyle and hamer prickinge to and fro ;

(大意) そしてよろい係もまたやすりと金槌を持つて, 馬に拍車をかけ, 大急ぎであちらこちらと(疾走する。)

Greimas によると, armeor, armoieor, armoier は XIII^es. 初出で, <fabricant d'armes> の意である。Dauzat によると, armurier は 1338年 初出で, <fabricant d'armoiries>, 即ち紋章職人をいう。Rothwell によると, AF armurer, -eurer は armourer の意である。

O. E. D. によると, armourer は one who equipped men-at-arms in their mail (兵隊, 特に重騎兵に鎖帷子の上によろいを着せた人) である。Skeat の Notes によると, Shakespeare seems to have observed this passage ; cf. Hen. V Act 4, prol. (=chorus) 12, という。これは Agincourt でヘンリー五世軍が仏軍に大勝する前の準備を歌ったコーラスの中にある²⁹⁾。

31. F arrogant a I. Pars. 395—400.

Arrogant is he that thinketh that he hath thilke bountees in him that he hath noght,...

(大意) 横柄な(人)とは自分が全く持たないような親切を持っていると思つている...人をいう。

Dauzat によると, OF arrogant は 1398年初出。これは O. E. D. の F arrogant 14th c. と一致する。しかし, もし Dauzat の数字に間違いがなければ, c1386年の Chaucer に12年後れる。とすれば Chaucer がラテン語の現在分詞 arrogans から, フランス語に先がけて造語したことになる。一方名詞形 Arrogance は I. Pars. の 390行にも出ている。Arrogance は seven deadly sins の筆頭である Pryde の枝の一つとして重要である³⁰⁾。そして OF でも, Dauzat によれば, ラテン語 arrogantia をもとに, arrogance という形で 1160年に初出している。OF において名詞形が早期にラテン語から採り入れられ, 形容詞形が 238年間も放置されていたということは面白い。抽象概念の議論が盛んで, それを人間個人にひきつけて議論することがあとになったことが推察される。英語では, O. E. D. によると, arrogancel303年初出, arrogant c1386年初出で, 抽象概念にしろ, 個人にひきつけた議論にしろ, 全体に遅い。Skeat の Notes によると, A considerable portion of this Tale (chiefly after §23) is borrowed from a French Treatise by Frère Lorens, entitled 'La Somme des Vices et des Vertus' である。しかし, 個人にひきつけた議論に必要な形容詞が英語においてフランス語より12年も早かつたことは重要である。抽象的な議論よりも具体的な議論を得意としていることになるからである。

32. F arsenik n G. CY. 798.

Arsenik, sal armoniak...

(大意) ヒ素, 塩化アンモニウム, ...。

Skeat の Notes によると, arsenik は alchemy において four spirits の一である³¹⁾。Dauzat によると, arsenic は 1398年初出である。ラテン語 arsenicum。もとギリシア語で「雄」の意だという。作用がはげしいかららしい。Rothwell によれば, AF にも arsenik がある。従って c1386年 Chaucer と OF の 1398年を比べると, OF の方が12年遅い。Chaucer 独自にラテン語か

ら、又は AF から直接借用したと結論できる。

33. F artelleries *n pl* B. Mel. 2520—5.

‘Melibeus answered and seyde, “...that I shall warnestore myn hous with toures, swiche as han castelles and othere manere edifices, and armure and artelleries, by whiche thinges I may my persone and myn hous so kepen and defenden, that myne enemys shul been in drede myn hous for to approche.’

(大意) 不在中に敵に妻を打たれ、娘に傷を負わされたメリピウスは妻ブルーデンスに答えて言った。「...家のまわりに塔をめぐらせよう。城その他の構築物にあるようなものを。それから武器武具も備えよう。こうして我が身と我が家を守るなら、敵は恐れて近づきまい。

Skeat の Notes によると、artelleries は missile weapons を言う。In Chaucers' time it referred to bows, cross bows, and engines for casting stones. Greimas では、artillier *v* 1164 年の次に artillerie *n* 1272 年で、《Ensemble des engins de guerre》の意である。Dauzat では、artillerie 1272 年初出で、XVI^e s. まで使われたという。特に Sens spécialisé aux canons á partir du XIV^es. (les premiers canons, en France, furent employés á Crécy [1346] par les Anglais.)。Rothwell によると AF にも artillerie がある³²⁾。従って c1386 年の Chaucer とは綴りが同じように不一致なところから OF, AF のいずれとも決められず、単に F としておくのがよい。

34. OF ascendent D. WB. 613.

これについては A. Prol. 417 で既出で、『紀要』第一巻 1984 年で扱ったので省く。

35. L aspect A. Kn. 1087.

Fortune hath yeven us this adversitee. / Som wikke aspect or disposicioun / Of Saturne, by sum constellacioun, / Hath yeven us this, al-though we hadde it sworn;

(大意) 運命により我々(二人)は逆境に堕ちた(= 捕われた)。土星の邪悪な相が天体の動きによつて大事な時に現われ、このような境遇になつてしまった。こ

んなことにはならないぞと誓つていただけれど。

Skeat の Notes によると、‘wykkid planete, as Saturne or Mars’ Astrolabe, ii. 4. 22 とある。Astrolabe は Oxenford 在学中の息子にあてた手紙形式の占星学論文である。Dauzat によると、aspect のフランス語初出は 1468 年である。ラテン語 aspectus からという。しかしこうなると c1386 年 Chaucer の方が 82 年も早い。AF にもなさそうなので、ラテン語の占星学書から直接に借用した可能性が高い。実際に Astrolabe の prologue でそのことを認めており、I nam but a lewd compilatour of the labour of olde Astrologiens, and have hit translated in myn English only for thy doctrine; and with this swerd shal I sleen envye. と書いている。

36. OF astrologien D. WB. 324.

The wyse astrologien Dan Ptholome

(大意) 賢い天文学者トレミー先生。

O. E. D. によると、英語 astrologer はフランス語の語尾 -ien にかえて native ending -er をつけたものという。Dauzat によると、astrologue 1372 年初出、但し á côté de astrologien とある。すると初出年は正確にはわからないが、c1386 年 Chaucer よりはやさうである。

文 献

- 1) Anglo-French の略。
- 2) Chaucer's Canterbury Tales の作品グループ記号。Group A から Group I までである。但しこれは Skeat による。The Riverside Chaucer は Fragment I から Fragment X に分け、Fragment の中味も Skeat の Group の中味と必ずしも一致しない。一致している時もあるが。
- 3) FKL は The Frankeleyns Tale の略。
- 4) 行ナンパー。
- 5) Skeat の The Complete Works of Geoffrey Chaucer Volume V は全冊 Notes to The Canterbury Tales... である。
- 6) Old French の略。
- 7) Rothwell は Anglo-Norman Dictionary の編集総主幹。

- 8) *Anglo-Norman Dictionary* による。但し AN は AF と言い換えて筆者は使用する。O. E. D.等と一致させるためである。
- 9) Latin の略。この中には classic Latin と medieval Latin が入るが、後者は ML と略記する。
- 10) CY. は The Chanouns Yemannes Tale の略。
- 11) Sheat の Notes によると、Chaucer chiefly follows the Legenda Aurea である。
- 12) Pars. は The Persones Tale の略。
- 13) Som. は The Somnours Tale の略。
- 14) *Anglo-Norman Dictionary* によると、un averement qe n'est pas a. de ley (申し立てによつては法が受容しない) YBBEd II (1307-27) XXiii 136 がある。
- 15) Mel. は The Tale of Melibeus の略。
- 16) *Anglo-Norman Dictionary* によると、pour acomplir notre testament et derreine volonte (我々の遺言を執行するため) *Reg Chich* ii 285.
- 17) *The Riverside Chaucer* の Glossary による。
- 18) p. 447に A considerable portion of this Tale... is borrowed from a Frenech Treatise by Frère Lorens, entitled 'La Somme des Vices et des Vertus' とある。
- 19) Kn. は The Knightes Tale の略。
- 20) 従来 of Robinson edition の第三版。1988年刊行。
- 21) Cl. は The Clerkes Tale の略。
- 22) Mch. は The Marchantes Tale の略。
- 23) Th. Sir Thopas の略。
- 24) Rothwell による。
- 25) Rothwell による。
- 26) ラテン語 in odio の in から来た接頭語である。
- 27) MK. The Monkes Tale の略。
- 28) NP. The Nonne Prestes Tale の略。
- 29) ...and from the tents, / The armourers, accomplishing the knights, / With busy hammers closing rivets up, / Give dreadful note of preparation, (そしてテントからは / よろい係が騎士の装備を完成すべく / 忙しく金槌でかぶととよろいをつなぐ鋸を打ち直し, / 出撃の準備のための恐ろしい音を発している。)
- 30) Inobedience, Avauntinge (<F. se vanter), Ipocrisie, Despyt, *Arrogance*, Impudence, Swelling of herte, Insolence, Elacion, Impacience, Strif, Contumacie, Presumpcion, Irreverence, Pertenacie, Veyne Glorie; and many another twig that I can not declare.
- 31) 29. armoniak の項を参照。
- 32) *Anglo-Norman Dictionary* による。

Abstract

A Study of Latin and French loan words which Chaucer first used in *The Canterbury Tales* except the General Prologue (1)

Katsuzo HOYA

This is a study of the Latin and French loan words which Chaucer first used in *The Canterbury Tales* except the General Prologue. The total number is 418, based on Appendix II: Romance Words Introduced by Chaucer in Joseph Mersand's *Chaucer's Romance Vocabulary* (Reissued in 1968). In this first installment 36 words will be treated. The date of the first borrowing is ascertained to be about 1386. So the present study compares the date with that of the first recorded appearance in the French language, and elucidates the rapidity, and the cultural background, of borrowing. Special emphasis is placed on distinguishing the two sorts of the French language, Continental French and Anglo-French (or Anglo-Norman), thus making clear the nuance of borrowing. (To be continued)